

---

# ローレライ

近江舞子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ローレライ

### 【Nコード】

N4279L

### 【作者名】

近江舞子

### 【あらすじ】

小粒の貝殻がほどよく散らばった静かな浜辺の波打ち際に、腰まで伸びた黒髪の人魚がひっそりと横たわっている。

小粒の貝殻がほどよく散らばった静かな浜辺の波打ち際に、腰まで伸びた黒髪の人魚がひっそりと横たわっている。鮮やかな水色の鱗が太陽の光を反射して、透き通った海と同じくてらてらと輝いている。

冬の雨によく似ていて美しかった。

わたしは彼女に近づくのをためらった。あまりに絵になる光景に、息をするのも忘れるほどだった。きつと一生覚えているだろう。崖に隠れて見辛かったが、日が暮れかけていた、あの時。

我に返って歩き出したわたしの砂を踏むわずかな音に彼女は気づき、こちらを向いた。住む家のない野良犬のような悲しげな瞳をして、唇は閉じていても寂しさを物語っていた。

「もしよかったら、わたしの歌を聴いてください」

彼女は小さな、しかし、シッカリした声でわたしに呼びかけた。

こわごと、世界すべてを恐れるような面持ちをしていた。

そんな彼女を労わるように、あやすように、わたしに迷わず返事をした。

「どうぞ、お聞かせください」

眠れる、夢を見ているような、あまやかな歌だった。とろけるような声、みずみずしいメロディ。生まれ変わったら彼女になりたい。そう思われた。

いつの間にか彼女は目に涙を溜めていた。あんなにも安らかに歌っていたのに、今は弱々しくうなだれている。距離が邪魔だ。わたしは駆け寄って彼女を抱きとめた。

「ごめんなさい」

そのまま彼女は何も言わず、わたしも何も言わなかった。しばしの静寂。もうあたりは薄暗くなっていた。少し膨らんだ半月が、彼女みたいに泣いている。

わたしは何もできない自分に腹を立てた。ちくしょう。わたしは無力だ。鳥肌がおさまらない。

とどまることを知らない彼女の涙の粒は海に流れていく。引く波に飲まれ、溶けて、最後にきらめいた。

「もう行かなくちゃ」

腕の中の彼女がようやく出した声は、別れを知らせるものだった。「あなたが歌を聴いてくれて、わたし嬉しかった。ありがとう。さようなら」

わたしが答える間も待たず、彼女は身を投げ、海に帰っていった。取り残されたわたしはぼうつと突っ立って、彼女が泳いでいくのをいつまでも眺めていた。遠く、はかなく、真珠の粒より小さくなつて消えるまで、目で追った。

わたしは他に何ができただろうか……。悔いがひっかき傷のように脳裏に強く残る。

ただ、彼女の純粋な聞き手になれたことだけは誇ってもいいと思う。

わたしがいなければ、彼女の願いは叶わなかったのだから。

(後書き)

初出: [tent/4480](http://www.i0000moji.com/con-<br/>tent/4480)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4279/>

---

ローレライ

2010年10月14日03時52分発行